調査報告　UDC 721(529.1)(519.5)

台湾・韓国における日本人建築家作品の現地調査

Modern architecture build by Japanese architect in Korea and Taiwan

藤森照信*
Terunobu FUJIMORI

東アジアとの交流

日本の近代建築（明治～昭和戦前のもの）の歴史的な研究は，戦後に本格的にはじまり，その後の40年間に大いに充実し，そろそろ国内だけでなく，近隣諸国との関係の中で再検討する時期にさしかかっている．

こうした状況の中で，私の研究室も先端を切って中国，台湾，韓国との研究交流を開始し，その第一陣として，昭和60年の夏から秋にかけて，各地に調査に出かけた．中国へは大学院生の藤原恵洋，村松伸，西沢泰彦が，台湾には藤森が，韓国へは前記4名に助手の本多昭一はじめ大学院生の水野信太郎，内田祥士，吉原秀明，研究生の青木信夫，杉田修一が加わった．

私が出かけたのは韓国と台湾で，この2地域について調査ぶりと成果を述べてみたい．

韓国を歩く

まず，韓国から．とにかく，どこにどういう建物があるかかならずしも明らかではない状態の中で，ありそうな所を捜し回り，運よく見つけると，それを写真に収め，メモを取るという都市のフィールドワークを行うわけで，同じフィールドワークといっても自然の中とはだいぶ違ってさまざまなトラブルが起こってくる．

まず，建物の写真を撮ることがトラブルを引き起こして困った．たとえば，ソウルの中心地に建つ国立銀行の韓国銀行（旧朝鮮銀行．日銀本店や東京駅の設計で知られる辰野金吾の作品）の写真を写していると，私服の警察が寄ってきて，何か言う．言葉がわからないから，こちらも色々言い返すと，向こうはこちらの持っている地図に注目し，検査して，それが観光用のものだとわかるとはじめて表情をやわらげ，手まねで写真はダメとやる．

別に，つかまるわけではないが，行く先々でこれをやられるから，困ってしまった．もちろん，南北分断の問題があるからの神経質さなのだが，しかし，オリンピックの時はいったいどうするんだろうかと思わざるをえなかったほどだ．

さて，成果のほうだが，予想以上に質の高い近代建築が残っていて実にうれしかった．まず，辰野金吾の旧朝鮮銀行（現韓国銀行）はじめ，塚本靖のソウル駅，藤岡重一の旧総督府，また，設計者不明の作では，旧京城医専本館（現ソウル大学医学部）がよかった．

こうした日本統治時代（韓国では日帝時代という）の建物をどう扱うかは，韓国内でもさまざまに意見が分かれていて，とりわけ旧総督府の保存は論議を呼んだそうだが，結果としては，国立博物館として保存が決まり，工事が行われていた．大筋としては，建築として質の高いものは残すという方針が決められていて，すでに10棟ほどの近代建築に文化財の解説文が付けられていた．

韓国には日本にはないほど質の高い大正期のジャーマン・セセッション様式の作品が作られたことが文献から知られており，この一連の作品をデザインした中村与資平の研究を大学院生の西沢君が着手していたことから，今度の韓国調査の1つの山は中村作品の追跡だったが，さいわいに，ソウルの天道教教会はじめ群山の旧朝銀支店，大邱の旧朝銀支店などの名作の現存を確認し，調査することができた．

ソウルの天道教教会

*東京大学生産技術研究所　第5部

以上のように短期間にもかかわらず大きな成果をあげることができたのは，かつて生研に留学された成均館大学教授　尹一柱先生の協力のたまものといわなければならない．

台湾の遺構

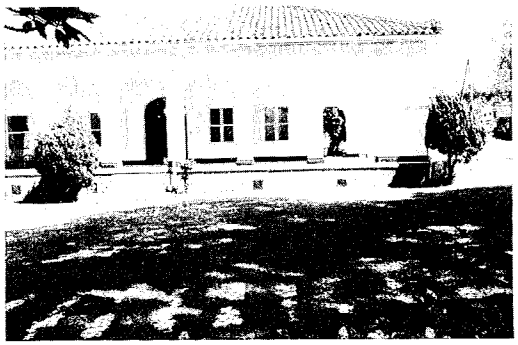
ついで台湾について．台湾については，当初より2つの目的をもって調査にのぞんだ．

1つは，日本統治時代（日拠時代という）の建物を見ることで，これについては，国立成功大教授の黄秋月先生はじめ李乾朗，洪文雄，郭中端の各氏の案内で主だったものをほぼ通観することができた．とりわけ，明治に活躍した松ケ崎万長の手になる新竹駅の建物を見ることのできたのは，松ケ崎作品が日本に残っていないだけに大きな成果だった．

もう1つのテーマは，幕末から明治初期の長崎などで作られたグラバー邸などのベランダ付のコロニアル住宅のルーツを探ることだった．このタイプの洋館はベランダ・タイプといい，インド，東洋アジア，中国，そして開国期の日本へと点々と港街づたいに伝わってきたことが文献的に知られているが，しかし，各地にどんな実物が残っているのか不明で，長崎の実例との比較研究ができない状態にあった．

そこで，台湾のベランダ付洋館の遺構を調べたわけだが，実に多くの実例が残されていて驚ろき，かつ喜んだ．時期も日本の開国とほぼ前後して建てられている．この時期のベランダ付洋館は東アジア一帯で莫大な量が建設されたことがわかっているが，中国にも韓国にもほとんど残されていなくて，日本と台湾が一番良く残していることが明らかとなった．

その両者を比較すると，台湾の場合は赤煉瓦のアーチでベランダを作っているのに対し，日本の場合は木や石の柱の上に木の梁を載せてベランダを作っている．おそらくこの差は，それまでの伝統的材料や技術の差が反映したものと思われる．



台湾淡水のベランダタイプの外人住宅

なお，台湾の調査は秋に行ったが，さすがに亜熱帯で，毎日，パパイヤや不思議な色と形の果物を食べては朝食と昼食に代えた．夕食は，もちろん向こうの研究者との交流のため中華料理をほうばったのは言うまでもない．

国際シンポジウム

以上のように行った調査の成果は，昭和60年11月29日に開催された国際シンポジウム〈日本と東アジアの近代建築〉（村松貞次郎先生退官記念会主催）で日本側発表の1つとして報告されている．また，この調査でお世話になった韓国の尹一柱先生，台湾の黄秋月，季乾朗，郭中端先生は全員が上記シンポジウムに出席される予定であったが，ただ一人，尹先生は，シンポの前日に急逝されてしまった．かって留学されたSEIKENに再び来ることを心待ちしておられたのに，哀しい出来事であった．なお，台湾でお世話になった台中東海大学の洪文雄先生は，現在，生研に客員研究員として留学中である．

1つの現場調査が，調査だけに終らず，新しい人脈を広げて行ってくれるのは，生研と奨励会の柔軟な体制のおかげと改めて感謝している．

（三好研究助成報告書　1986年7月9日受理）